

わたしとおかあさんの点字

広島県立広島中央特別支援学校
小学部 第2学年 田中 一華

(原文点字のため墨字訳)

わたしとおかあさんの点字

二年 田中 一か

わたしは、五さいの時に広しま中おうとくべつしえん学校の教いくそうだんではじめて点字のことを知りました。それまでは、ずっとおかあさんにすみ字（見える人がつかう字）でひらがなを教えてもらって、書いたり読んだりしていました。でも、点字を知って、手でさわって読めるので、すみ字より分かりやすいことに気づきました。目が見えなくてもべんきょうでできることが分かりました。

点字のべんきょうがはじまって、一文字読みのあ行からな行まではかんたんだったけど、は行からだんだんむずかしくなりました。読みにくくて、「これは何だろう。」と考えながら読むのがくるしかったです。でも、たくさん読めるようになってくると、うれしくて点字がすきになりました。

一年生の夏休みに、おかあさんと点字を読むきょうそうをしました。おかあさんとのきょうそうの方は、一人十五まいずつたん語のカードを置いて、読めたカードをはこの中に入れるというものです。毎日毎日れんしゅうをしたけど、夏休みの長い間、わたしがかてたのは、たった三回だけでした。その時はくやくしくて、かなしくて、おこってつくえをどんと力いっぱいたたきつけました。でも、れんしゅうをつづけていって、やっとかつことができた時は、「やったー。」と、大声でさけびました。とってもうれしかったです。その時、おかあさんはわたしに、おかあさんが読めなかった三まいのカードを「一か、読んでみて。」

とたのみました。わたしがそれをまちがえずに読んだのを聞いて、おかあさんは、

「一か、すごいね。こんなに読めるようになったんじゃね。おかあさんはしゅうぶのことしか考えてなくて、どれだけ読めるようになったか気づかんかったわ。」

と、言いました。わたしは、おかあさんにほめられてとてもうれしかったです。

それからしばらくすると、おかあさんが点字で書いた手紙をくれました。

「一かへ、今日は点字のべんきょうをたくさんがんばったね。学校でもがんばってね。ママより」

はじめておかあさんからもらった点字の手紙は、わたしのたからものです。

その時わたしが思ったのは、わたしは学校でも点字を教えてもらっているけど、おかあさんは家で、一人で点字のべんきょうをして、読んだり書いたりするこ

とができるようになってすごいなということです。

それから、おかあさんはわたしのために、点字で本を作ってくれました。少しずつ本がふえて、今ではぜんぶで十四さつになりました。今まで点字の本が家にはなかったので、とってもうれしいです。

本がだんだんとふえてきて、おかあさんとそうだんして「一か図書」と名前をつけました。わたしは、はじめはお話が考えられなかったけど、今は、自分でもお話を考えて「一か図書」をふやしています。これからも、もっともつと「一か図書」をふやして、点字をはやくうったり読んだりできるようになりたいです。

〈指導者の言葉〉

本校の小学部では、自分を見つめ障害を理解する一つの機会として、自分の伝えたい思いを文章にして発表する「お話会」を行っています。この作文は、本児童が、1年生のときにお話会で発表したものを、2年生になってから再考したものです。本児は、見えにくいという状況の中で地域の幼稚園に通い、平仮名の読み書きを必死に練習していました。しかし、点字と出会い「触る」という自分なりの勉強方法に気付きます。点字に出会ったときの喜びと、お母さんとの二人三脚での練習のエピソード、点字を習得するまでの葛藤や気持ちの変化が素直に表現されています。

1年生のときに書いた作文を推敲していくことで、点字の大切さや素晴らしさ、お母さんへの感謝の気持ちを再確認するきっかけになると考え、2年生になってから再考を行いました。再考する際には、学習指導要領「B書くこと」の第1学年及び第2学年の目標である「(1) イ 自分の考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること。」及び「ウ語と語や文と文の続き方に注意しながら、つながりのある文や文章を書くこと。」という2点をねらいました。また、読む人が分かりやすいかどうかという相手意識を持たせながら、読み返しを行いました。

今後も、お母さんと一緒に習得した点字の素晴らしさ、触ることの良さを感じながら、自分なりの学習方法に誇りを持って学習に取り組んでくれることを願っています。